【347】

氏　名（国籍）	**レオナルド・デ・アリサバラガ・イ・プラド（アメリカ）**
学位の種類	博　　士（文　　学）
学位記番号	博　乙　第　2162　号
学位授与年月日	平成 17 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**Anaglyptica Variana: Column Capitals with Sculptural Relief, and Associated Frgments, Related to the Cult of Elagabal** （アナグリプティカ　ウァリアーナ－エラガバル神崇拝にまつわるレリーフ彫刻の施された柱頭、およびそれに関する断片についての研究）

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒　木　正　純
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	鷲　津　浩　子
副　査	筑波大学助教授	Ph.D.（言語学）	池　田　　潤
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	大　熊　　榮

論　文　の　内　容　の　要　旨

本論文は，「エラガバルス」（Elagabalus）もしくは「ヘリオガバルス」（Heliogabalus）として誤って知られるが，正しくは「ヴァリウス」（Varius）というローマ皇帝（c.203-March 11，222）をめぐる研究である。構成は，以下の通りである。

I: Introduction; physical description of the artefacts; preliminary classification of questions to be discussed
（序 : 人工遺跡の物質的記述 ; 議論される問いの前段的分類化）

II: Critical review of the academic literature to date:（今日までの学術的文献の批評的概観）
First stage of the discussion: 1873-1902
The State of the Question in 1902
Second stage of the discussion: 1902-1962
Third stage of the discussion: 1962-2002

III: The State of the Question in 2002（2002 年の問題の状況）

IV: A considered as a work of art: The Idyll of Elagabal（芸術品と考えられた A: エラガバルスの牧歌）
Appendix: The reconstruction of the Idyll of Elagabal（付録 : エラガバルスの牧歌再構築）

第一部は，著者が収集したレリーフ彫刻のいくつかの断片を吟味するものである。その資料は，レリーフ彫刻をもった大理石でできた 3 つの円柱の頭部であり，19 世紀後期にローマのフォーラムを発掘していて発見されたものである。また，その際，4 つの関連した断片もみつかり，そのうち 3 つが現存している。この 3 つの主要な円柱頭部の断片のうら，ひとつは A で，比較的保存状態がよく，3 面にあるレリーフ彫刻はよく識別できる。B と C と名付けられた残りの 2 つは，かつては 3 面に彫刻があったと推測されるが，その模様はほとんど判別できない。そのため，本論文の議論のほとんどは，この円柱頭部断片 A に基づいている。さらに，前述の現存する関連した断片は，本論文完成後に再発見されたので採用していない。この資

料を吟味したところ，Aについて発見されたことは，従来，気づかれることのなかった碑文である。その碑文を拡大写真にとり，吟味している。

第二部は，本論文でいちばん長い部分に相当するが，これらの断片をめぐり，1873年から1997年まで書かれてきた文献と本論文の議論に関係する以下の論文を年代的に批評して，今日的問題を析出している：Heiric Jordan（1873），Georg Wisssowa（1883），Franz Studniezka（1901），Christian Hulsen（1902），Walter Altmann（1902），Franz Cumon（1905），Orma Fitch Butler（1908[1910]），Alfred von Domaszewski（1909），J. Stuart Hay（1911），L. Pernier（1922），Hiller von Gaertringen，F. Littmann，W. E. Weber，& O. Weinreich（1923/4），Eugenia Strong（1926），Eugenia Strong（1929），Stanley A. Cook（1930），Andreas Rumpf（1931），Friedrich Wilhelm Goethert（1936），Franz Alteim（1943），Theodor Klauser（1950），Hans Peter L' Orange（1952），Charles Picard（1951-2），M. Lambertz（1955），Alfonso Bartoli（1956-7），Eugen von Mercklin（1962），J. T. Milk（1966），Theo Optendrenk（1969），Henri Seyrig（1971），G. Ray Thompson（1972），Timothy D. Barnes（1972），Ferdinando Castagnoli（1979），Elena di Filippo Balestrazzi（1985），Robert Turcan（1985），F. Coarelli（1986），M. Pietrzykowsky（1986），Christian Auge & Pascale Linant de Bellefonds（1981），Cesare Letta（1989），Martin Frey（1989），Robert Turcan（1993），Steven E. Hijmans（1996），Francois Chausson（1997）。

第三部は，対象としたレリーフ彫刻を芸術作品として扱い，その図像的意味を分析し，ここに描かれた図は，全体的統一がとれていて，右から左へと読むことが可能な物語をなしているという前提のもとに，これがエラガバルスの宗教の宇宙観，神学，儀式を表象しているとし，その読解可能な仮説を提出している。このレリーフ彫刻は，部分的に損傷しているものであるが，そこに描かれている多様な神を，貨幣やその他の彫刻の表象を参考に復元し，全体像を絵にしている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

著者は，これまで「歴史部門」（Historica）と「神話部門」（Mythologica）からなる大きな研究プロジェクト「ヴァリウス研究」（Studia Variana）を遂行してきた。前者は，「ヴァリウス」の生涯と統治を探求するものであり，従来書かれてきた歴史的文書の言説と，貨幣，碑文，彫刻の類から導き出せる証拠と対比させておこなうものである。また，後者は，「ヴァリウス」伝説と神話を，古代から現代に至る文学と芸術を対象に追究するものである。本論文の第一部と第二部は，この大きなプロジェクトの「歴史部門」に相当し，第三部は，「神話部門」に相当する。

本論文が対象とする「ヴァリウス」とは，ローマ・セヴェラン王朝（Severan dynasty）（キリスト教暦193-235年）の皇帝で，歴代皇帝の中でも，いちばん論議を呼んだ皇帝のひとりであり，統治期に，ローマの宗教的伝統を無視し，性的タブー，とりわけ同性愛を犯したとして有名である。彼は，ローマのパンテオンの頭部に位置づけられていたユピテル像を，新しい神「デウス・ソル・インヴィクトゥス」（征服されざる神，太陽）の像に据え変え，この新しい神のもとの宗教を指導したとされてきた人物である。その後，彼は初期キリスト教の歴史家からもっとも悪くいわれた皇帝のひとりとなり，19世紀ヨーロッパのデカダンス運動では英雄として再登場してきた。

本論文は，こうした皇帝を表象したと思えるレリーフ彫刻を網羅的に詳細に吟味し，関連した先行研究を収集し，批判的吟味をくわえた先端的な研究である。とりわけ，本論文の独創的な点は，現存する破損したレリーフ彫刻を復元し，それを図像学的に分析し，「エラガバル」の宗教について体系的に解明しているこ

とであろう。この作業のもとになる，損傷していた部分の大部分を再構築し，具体的画像モデルを呈示し，それをもとに「エラガバル」の宗教理解につなげていることは，本論文の独創的な点となっている。本論文が提出した仮説の復元図は，専門・関連分野に新知見をくわえるものであり，今後，関連する学会で議論され，一層綿密な研究がなされると期待される。

こうした意欲的で挑戦的な研究ではあるが，本論に欠点がないことはない。その欠点は，著者の能力の問題というより，テーマそのものから派生するものである。つまり，資料不足である。さらに，きわめて専門性の高い論文であるがゆえに，この研究が古代文化研究やその他の関連研究にどう貢献しうるかの大きな位置づけがなされていないことが残念である。しかし，それは読者の応用力にかかっていることかもしれない。

本論文は，専門・関連分野に新知見をくわえるものであるだけでなく，ここで提起された諸問題は，新しいメディアの助けを借りて類似の研究を誘発する可能性があり，この点でも，本論文の価値は高い。最後に，本論文は，歴史と文学と芸術の幅広い教養が可能にしたものであり，また，それに裏打ちされた学際的研究であることも特筆される。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。